

2019年度 SPARC Japan セミナーの活動計画について

1. 2019年度の考え方

2019年度の SPARC Japan セミナーは、年間テーマを「令和時代のオープンサイエンス」とする。「令和時代」の初めというこの節目で、わが国でオープンサイエンスをより実現していくために、研究者や図書館員らが具体的にどのような行動をしたらよいかを議論したい。今年度は以下のとおり4つの企画案を検討した。

- ・ 第1回：研究者ディレクトリや SNS の動向を踏まえ、研究者情報サービスの観点からみた学術情報流通の将来を見通すことを試みる。
- ・ 第2回：昨年度注目が集まり日本が主体的に考える要素がより高い人文社会系について今年は OAWeek で取り上げる。
- ・ 第3回：「明日から始める、最低限の、研究データ管理」というような、実務者がすぐに手が出せるレベルの研究データ管理のあり方を模索する。
- ・ 特別編：オープンアクセスのステークホルダーが一同に会して、現在の学術情報流通に係る動向を俯瞰しながら、オープンアクセスのあり方と今後の日本の取り得るべき戦略を議論する。

2. 企画(案)

日程 (予定)	テーマ(案) 及び 企画 WG メンバーの関心事項	WG 担当 (予定) ◎主査	備考
第 1 回 9 月	<p>○研究者情報サービスの動向</p> <ul style="list-style-type: none"> 説明責任のためには研究者総覧が必要な状況であるが、それをどう管理してどう発信していくかは組織によってまちまちである。これをきちんと管理しなければ、きちんとした業績評価は難しいだろう。 この 1 年では、Researchmap が科研費の申請と連携するということがあり、所属大学では、学内の研究者総覧が Researchmap に連携しているのでこれに書き添えてデータ登録して公開せよという指令が出て、全学の 1/4 程度の研究者が慌てて登録をしたようだ。 研究者 ID と研究評価そのものとは大きな関わりをもつし、機関リポジトリに登録された論文とどう紐づけを図るかという問題もある。 研究活動のあらゆるアイテムに PID が付与されつつある。既に商用サービスも生まれている中で、それがどう可視化されるのか。研究評価の前の研究インパクトについてどう考えるべきか。 ID がついて紐づけされるのは一見良いことのようにあるが、そもそもつながって良いのかというところも考える必要があるのではないか。 ドイツで OR をやっていて そのセッションの一つが、CRIS (Current Research Information System) としての機関リポジトリというのがあって、世界的にそういう話題になっているようだ。 いろいろなステークホルダーがいて利害が異なり、研究者 ID という言葉のみ共通していて、考えていることは全く別のものと思われるが、その利害関係者があまり可視化されていない。 	◎高久(筑波大) 矢吹(横浜国立大) 山形(北海道大)	候補日： ・終日の可能性
第 2 回 10 月 (OAWeek)	<p>○人文社会系のための OA</p> <ul style="list-style-type: none"> 定点観測として、ある程度定着してきた人文社会系のオープンデータについてやるのはどうか。 デジタルアーカイブ学会 の関係者に講演してもらい、分野間での違いをディスカッションしたり、デジタルア 	◎中村(東京大) 鈴木(NII/CODH) 林(NISTEP)	・候補日： ・本年度 OAWeek テーマ "Open for Whom? Equity in Open

	<p>ーカイブの現状とオープン化の現状の距離感をみたりするというのはどうか。また金銭面の内容は重要であるため、出版関係者に登壇してもらおうという案も昨年挙げた。</p> <ul style="list-style-type: none"> デジタルアーカイブという言葉が示しているように、preservation の方から入ってきているので、オープンサイエンスとのギャップがあると感じている。 本セミナーはどちらかというと図書館関係者やオープン化を進めている人達で、デジタルアーカイブ学会は実体物を持っているけれどもそれをどう出すか(デジタル化するか) というところを考えたい人たちではないか。 オープンサイエンスといったときに、現場の人たちは自分たちに何ができるのかまだよくわかっていない。 人社系の研究データや評価について取り上げたらおもしろいだろう。 社会科学系は昨年のセミナーで政治学関連があったが、このあたりの事例はもっとあるのではないか。オープンサイエンスのその先の市民科学につながるというところで、自然科学と人文学まではわかったが、社会科学はどうなっているだろうか。 人文・社会科学系研究推進フォーラム も情報交換会等を行っており、この関係者と組むことでおもしろくなりそう。 		<p>Knowledge" (誰のためのオープン化? オープンな知識における平等を考えよう)</p> <p>開催期間 October 21 - 27</p> <ul style="list-style-type: none"> 終日の可能性
<p>第3回 (1月)</p>	<p>○研究データ管理</p> <ul style="list-style-type: none"> オープンサイエンス関連では大きめの議論が多くて、末端の研究者が今何をしたらいいのかがわからないというのが現状だ。研究者に限らず、大学等の研究支援職員や図書館職員もまたそうであろう。具体的に明日から始めて最低限やるべきなのはどのようなことかということ教えるような回を設けてはどうか。 現状では研究データをエクセルに書いているところもあるが、それでいいのだろうか。放っておいても何も進まない問題。うまくやっている事例を知る機会にしたい。 図書館の役割として、明日何をすべきであるかということが見れば、そこに図書館関係者がコミットすれば 	<p>◎八塚(NBDC) 西村(富山大) 林(JIRCAS)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 終日の可能性

	<p>新たなスキルやロールにつながるような議論ができる のではないか。</p> <ul style="list-style-type: none">• 誰（研究者，URA，図書館員）が，どのようにやった らいいのか。		
--	--	--	--